

この畏るべき言葉の魔法

— 池田晶子「言葉の力」の教材価値について —

丹 藤 博 文

0 はじめに

『14歳からの哲学』などで知られる池田晶子の「言葉の力」が中学校三年の国語教科書（教育出版）に掲載された。国語の教科書である以上、小学校から高等学校まで、言葉に関する教材は、「言語教材」「ことば教材」などと呼ばれたりして、どの教科書にも必ずといっていいほど採用されている。

また、「国語力」「言葉の力」なる用語は、新学習指導要領をはじめとして、このところの国語教育界のキーワードといってもよく、すでに手垢にまみれた観さえあると言っていだらう。

池田の「言葉の力」は、言語についての彼女の考えを表現したものである。したがって、教科書的なカテゴリーとしては説明的文章、それも言語教材に相当すると一応言えるだろう。すると、言語教材とは言語についてわかりやすく解説する、子どももの言語に関する認識を深めるといふ啓蒙的な意味を持つことになる。しかし、池田の「言葉の力」はそのような教科書的枠

組みからは逸脱していると見て差し支えない。子どもにとって、いや教師にとつてさえ、けつしてわかりやすいとは言えず、「わかりにくさ」は「教えにくさ」でもあり、教育現場からの反応としては不評であることは想像に難くない。

「池田の文章は、私にとつて、さっぱり意味が確定しない。困った挙げ句、どうもこれは「詩」なんじゃないだらうか」（戸田功「哲学することから教育することへ——池田晶子「言葉の力」という教材の個人的波紋——」『日文協 国語教育』No.38 日本文学協会国語教育部会 二〇〇八年五月 二頁）「この教材に接した国語教師の多くが戸惑い、怒り出す人までいる」（須貝千里「池田晶子「言葉の力」の位置——言語観の転換のために——」前掲誌 二二頁）とも述べられている。

教材としての意味もにわかに確定しない、説明文どころか詩でもあるかのような、さらには言葉の教育に携わる者が戸惑い怒り出す、そのような教材とはいったい何なのか、そこに教材としての価値なり可能性はあるのか。池田の「言葉の力」の教

育的意味・教材価値を考察することが本研究の目的である。

1 言葉の魔法

池田の「言葉の力」は教科書のために書き下ろされたものであり、しかも現行の中学3年用教科書に掲載されたのが初めてであるから、教育界に広く認知されているとは言い難い。さらに、難解とされる文章を要約的に紹介するのも困難を極める。そこで、まず全文を引用することとする。なお、文頭の番号は便宜的に丹藤が付したものである。

〔1〕人間は言葉を話す。

〔2〕話すだけではなくて、読んだり書いたりもする。このことは、よく考えると、本当に不思議なことだ。

〔3〕これは本当に不思議なことだ。多くの人は、これを当たり前のことと思つて、それについて考えるところをほとんどしていかないけれども、あたりまえのことより不思議なことは、この世の中には存在しない。あたりまえの不思議に気がついて、それを考えながら生きる人生と、あたりまえをあたりまえと思つて、それを考えることをせずに生きる人生とは、人の人生は全く違ったものになる。言葉の不思議というのは、そういうあたりまえの不思議のうちでも、最も不思議なものなのだ。

〔4〕例えば、人間は、いつ、どこで言葉を覚えたのかを考えてみよう。

〔5〕人間一般について考える前に、まず自分のこととして思い出してみるといい。わたしたちは、まだ言葉を話す前の子供の時、言葉を話すことを、両親やまわりの大人たちから教わった。しかし、彼らは自分で言葉を作つて、それをわたしたちに教えているわけではない。彼らもまた、彼らの親たちから教わつたのだ。そして、その親たちもまた、その親たちから教わつたのだ。

〔6〕そうすると、言葉は、いつ、どこで、だれによつて作られたのだろうか。

〔7〕言葉は、わたしたちの祖先が作ったものなのだろうか。何かの物を見て、叫び声をあげ、その叫びが一つの音になり、その物の名になったのだろうか。しかし、もしそうだとすると、その一人の人が、その物はこの名だと決めているだけで、他の人間には通じない。言葉というのは、自分以外の人にも通じること言葉なのだから、この想像は成り立たない。

〔8〕だとすると、祖先たちが大勢で集まつて、この物はこの名で呼ぼうと決めたのだろうか。

〔9〕この想像は、一見もつともなようであるが、少し考えるとおかしいとわかる。この物をこの名で呼ぼうと皆で決めるためには、この物とこの名とは同じことを意味すると、

皆に先にわかっているなければならぬはずだからだ。そうでなければ、同じと同一ことを決めることはできないからだ。

「10」では、同じと皆にわかっているその意味は、いつ、どこで、だれが決めたのだろうか。

「11」言葉の不思議とは、意味の不思議だ。言葉の意味は、いつ、どこで、だれが決めたのでもない。

「12」初めに言葉があった。言葉は神とともにあった。言葉は神であった。」

「13」すべてのものは、これよってできた。」

これらは、聖書の言葉だ。言葉の不思議に気がついた昔の人は、こう言った。言葉の意味は、わたしが生まれるよりも前から、そして、実は、地球や宇宙が生まれるよりも前から、どういうわけだか存在しているということを言ったものだ。

「14」神」だなんて、現代のわたしたちには、どうもうまく考えられない。地球や宇宙は、ビックバンによってできた物理的な存在だし、人間は、その知能をもってすれば、やがてはなんでもわかることができるころの生物だ。現代の科学は、そんなふうにいることが多い。しかし、違う。なんでもわかるはずの人間にも、わからないことがある。それが、言葉だ。言葉はどのようなしてきたのか、言葉なんてものがどうしてあるのか、そのことは、日々こうし

て言葉を使って生きているにもかかわらず、人間には絶対にわからない謎なのだ。

「15」絶対にわからないものごとを、「神」という名で呼ぶのは、その意味ではまちがっていない。事実、その言葉の意味が存在するからこそ、その物やその事が存在するのだから、言葉とは万物を創造する神様に似たものと言っている。言葉の力とは、まさしく創造する力なのだ。

「16」昔の人は、このことを事実としてよく認識していた。だからこそ、言葉を敬い、言葉を畏れた。「言霊」という表現に、それは端的に表れている。言葉で言うとそれは存在する、と彼らは考えたのだ。言葉には、ものごとを創造する力があるからだ。小さいころ、母親のひざの上で絵本を読んでもらったとき、実際にはいないはずの人物や動物が、語られる言葉の中に、まるで目に見えるかのようにありありと出現したのと同じだ。言葉の力というのは、魔法のようなものなのだ。

「17」ところが、現代人は、この畏るべき言葉の魔法を、ほとんど忘れてしまっている。忘れて、逆に、言葉は人間が作り出し、勝手に使える道具なのだ、と思うようになっていく。自分の思いや考えを他人に伝えるための道具、言葉はコミュニケーションの道具の一つというわけだ。

「18」あるレベルでは、それはまちがっていない。「水をくんださい。」と言えば、そこに水がなくても、その意図を伝え

ることはできるのだから、言葉は確かに便利な道具だ。

「19」けれども、ここで先の聖書の言葉も思い出して、もう一度考えてほしい。そもそも、ある動物をある名で言うことと決めたのは、だれだったろうか。それは決して人間ではなかったのだ。ましてや、今回こっきり生まれてきただけのこの自分であるわけがない。水を「水」と言うことに決めたのは、水を「水」と言うことで在らしめた「神様」だ。言葉としての神様だ。それなら、神様であるところのその言葉を、それによって創られたところの人間が、どうして道具として使うなんてことができるだろうか。

「20」人間が言葉を話しているのではない。言葉が人間によって話しているのだ。生涯に一度でも、この逆転した視点から、自分と宇宙を眺めてみるといい。人生とは言葉そのものなのだ、人は必ず気がつくはずなのだ。

「21」ところが、言葉を単なる道具と思つて、大事に扱うことをしない現代人は、当然のこと、言葉からのしつぺ返しをくうことになっている。それがまさしく、現代社会の光景だ。

「22」「人生なんてつまらない。」と、いつも口にかけている人が、自分の人生をつまらないものにしてしているのは、言葉も自分も大事にしていないからだ。

「23」「しょせんは言葉だ。現実が厳しい。」と言う人は、言葉が現実を創つていないことを知らない。現実的に生きるこ

とができないのだから、現実が厳しいのは当然だ。

「24」「言葉は言葉、本心は別。」という言い方をする人もいる。言葉はうそをつくための道具というわけだが、うそをつくことによってだまされているのは、実は他人ではない。他人は、その人の行いを見て、うそをついているとわかるからだ。だまされていると気がつかないのは、うそをついている本人だ。うそをついている本人は、うそをつくことが自分にとってよいことだと思つて、うそをつく。しかし、自分で自分にうそをつき、自分のことをだますことが自分にとってよいことであるわけがないではないか。

「25」言葉を信じていない人は、自分のことも信じていない。しかし、自分を信じていない人生を生きるのは、とても苦しくて大変だ。言葉ではああ言つたけれども、本当はそう思っていない。そんなふうにしかな生きられない人生は不幸だ。言葉と自分が一致していない人生は不幸だ。だから、本当の自分はどこにいるのかを、人はあちこち探し求めることになる。しかし、本当の自分とは、本当の言葉を語る自分でしかない。本当の言葉においてこそ、人は自分と一致する。言葉は道具なんかではない。言葉は自分そのものなのだ。

「26」だからこそ、言葉は大事にしなければならぬのだ。言葉を大事にするということが、自分を大事にするということなのだ。自分の語る一言一句が、自分の人格を、自分

の人生を、確実に創っているのだと、自覚しながら語ることだ。そのようにして、生きることだ。

[27] 言葉には、万物を創造する力がある。言葉は魔法の杖なのだ。人は、魔法の杖を使って、どんな人生を創ることもできる。それは、その杖をもつ人の、この自分自身の、心の構え一つなのだ。

以上が教科書に書き下ろされた池田の「言葉の力」全文である。この文章の掲載は、二〇〇六年度版を嚆矢とすることから、新教材の部に属すると言っているであろう。

日本文学協会国語教育部会は、二〇〇七年五月に「言葉の力」をテーマとしたシンポジウムを行い、池田の「言葉の力」が取り上げられている。また、『日文協 国語教育』(No.38 二〇〇八年五月)において、そのシンポジウムをもとにした特集が組まれている。まずは、『日文協 国語教育』(No.38)によって、池田の「言葉の力」がどのように受容され評価されているかを見ることにしたい。

第一に「教材」という観点からである。中村龍一は「池田晶子の『言葉の力』(教育出版 中三)は、説明文の学習に新たな可能性を拓いた。そこでは、学習者が真に考えるに値する言葉の根源的「問い」が提起されているからである」(「文脈の中で他者と出会う」 三八頁)としている。何かの説明としての教材ではなく、それ自体が「根源的「問い」」であると高野

光男も(「前略」池田晶子の「言葉の力」は私たちの教材観を大きく揺さぶるものであるという感想は、今回読み直してみても、変わっていない)「池田晶子「言葉の力」の強度」(三四頁)とする。高野が「私たちの教材観を大きく揺さぶる」と述べているのは、池田の文章は「今日の文化論的な地平に鋭く迫っている」(二五頁)と考えるからであろう。

高野も指摘するように、教材という枠組みに収まることなく、今日の言葉をめぐる文化論的状况にコミットしているという点が第二の際だった特徴である。須貝千里は、この教材が難しい、教材が悪いといった反応に対して「国語教育の大転換の試金石が隠されている。日本の教育の大転換の試金石がある」(二二頁)と述べている。

どういうことか――。

基本的には、言語観をめぐる問題であり文化論的状况論とも重なっていく問題なのである。

八〇年代、この国にも思想・文化の上で構造主義が導入・喧伝され、文学研究においても、「作者の死」や「作品からテクストへ」といったパラダイムチェンジが必須の要件となった。その核心は、ソシユール言語学であったことは言うまでもない。ソシユール言語学が画期的であったのは、それまでの「意味するもの」・「意味されるもの」・「指示対象」といった三項で言語を考えるのに対して、「指示対象」を言語学の領域から消去した点にある。シンフィアン(記号表現)とシニフィエ(記号

内容)の差異でしかなく、それも恣意的なものとされたのである。言葉から対象指示性を剥奪することはできないものの、指示対象と一対一の対応関係にはないとされた。言葉の意味は、指示対象との対応ではなく、シニフィアンとシニフィエとの差異にある。したがって、言葉は実体ではないばかりか、意味内容伝達の道具でもないことになる。ジャック・デリダはラディカルに「テクストに外部はない」と看破し、ロラン・バルトはテクストには還れないとしたのである。言葉は実体ではもちろんないし、モノやコト(現実)があつて言葉があるのでなく、言葉がモノやコトをあらしめる。言語論的転回以後、意味はテクストには還れず浮遊することになり、読むこと自体行き場を失い、理論的にはアナキズムに陥ることになる。その後、言葉は実体性を失いディスクール(言説)として、そこに孕まれる暴力なり権力なりが暴かれるというカルチュラスタデイズ(文化研究)へとさらなるシフトを遂げることになる。

国語教育では、読みはテクストと読者の対話であり相互作用なのだというテクスト論的・受容理論的言説が流布したりもしたが、肝心の言語観の転回に対応しきれず、相変わらず実体論を引きずっており、実体論に依拠したままで「テクスト」「構造」などと言うという矛盾に足下を拘われたまま、身動きできないでいる。その状態は、今日まで続いている。一方で、現場では千篇一律のごとく「作者は何を言いたいのでしょう」と実体論そのままに発問されたりするのである。全体的な思想や文

化の状況と国語教育の理論的言説と学校現場が、表面的に用語などは共通するものの、それぞれに溝を深めつつあるというのが私の見方だ。国語教育の理論的言説と現場のリアリティーが交差する地点に言語観の転換(言語論的転回)を置かねばならない。この一〇年、そう発言してきた。

以上、甚だ簡単ではあるが、言語をめぐるこの二、三〇年の状況を鳥瞰してみると、池田の文章が持つ意味、しかも教材としての意味が輪郭を帯びてくる。つまり、池田の「言葉の力」は言語論的転回を果たしている。例えば、「20」「人間が言葉を話しているのではない。言葉が人間によって話しているのだ」は、ソシユールによる「言語名称目録観」批判とも共振する。中村や高野同様、私もこの教材が出色だと考えるのは、単に記号論や言語論的転回を説明・解説しているのではなく、この文章自体が言語論的転回を果たしているという点にある。言語論的転換を果たした授業が成立することができるのかどうか。この問題意識がまず共有されることが国語教育を展開するうえで必須のことだからである。須貝の「大転換」とは、その意味で、けっして大袈裟なものではないのである。

しかし、須貝が「国語教育の大転換」と言うのは、このような意味での「転換」にとどまるものでないことは強調されてよい。それは、端的に言つて、転回のさらなる転回ということである。八〇年代にはじまる第一の転回が生んだものは、一言で言うなら「相対主義」ということだろう。「カノン」も「真理」

も「普遍」も虚妄として退けられ、「公共性」も「倫理」も陰が薄くなってしまった。相対主義はわれわれのものの見方（イデオロギー）を相対化するけれど、その後どうしたらいいかについては何も展望し得ない。現下の社会状況が示すように、相対主義は容易にニヒリズムに反転する。八〇年代、ポストモダンには、それなりの説得力もリアティーもあった。時代の必然と言っているだろう。しかし、現在、「構造改革」「規制緩和」に代表されるような時代のあり方について、誰もが疑問に思い不安に陥っている。そうかといって、モダンなり実体論へ回帰すればいいというわけにもいかない。そこでポストモダンのアナキズムそれ自体をどう超えていくかが問われなければならない。その意味でも「転回の転回」を模索することが、これからのメルクマールにはかならないのである（一）。

以上のことから、言語論的転回の「再転回」ということが、池田の文章の画期的な点である。これは、先に難解な例として挙げた「13」や「20」にかかわることもある。

「言葉の意味は、わたしたちが生まれるよりも前から、（中略）どういうわけだか存在していた」といった表現を解く鍵が「絶対性」ということにある。もちろん、これは実体論的な意味での「絶対」ではない。言語論的転回を果たしたうえで、絶対性を希求する。ここに、池田の「言葉の力」のラディカリズムがある（二）。

言葉の（意味の）絶対性？ どういうことか――。

例えば、「美」という言葉がある。何を「美」とするかは、確かに時代によっても個人によっても異なる相対的なものだ。しかし、「美」という言葉の意味自体は絶対だと池田は言う。「善」と「悪」にしても、善かれと思つてしたことが相手の恨みを買うといったことはよくあることだ。何が「善」で何が「悪」だと一概に言えるものではない。なぜ人を殺してはいけないかというところに簡単に答えることは難しいが、それでも人を殺すことは悪だということは絶対的なものではないのか。「死」にしても、私たちが目にすることができるのは、「死体」であつて「死」そのものではない。「死」もまた目には見えないものである。しかし、目に見えないからといってないわけではない。言葉の意味として、つまり観念として、在るあるのだ。そのことを絶対性として考えるのである。

言葉が不思議であつたり、「魔法のようなもの」であるのは、目には見えないものを在らしめるといっただけでなく、絶対性を備えているからだ言えよう。言葉の絶対的な意味を「考える」、そのことを池田は子どもに、いやわれわれにも促しているのである。

2 魔法の言葉

文化論的状况における、あるいは国語教育の問題として、池田晶子「言葉の力」の持つ意味について論じてきた。以下、授

業のことをふまえつつ本文を読んでいくことにしたい。

本教材が不評なのは、その難解さにあると言われる。しかし、難解と思われるのは、次の二点におおよそ集約されるであろう。

〔13〕(前略)言葉の意味は、わたしたちが生まれる前から、人間が生まれるよりも前から、そして、実は、地球や宇宙が生まれるよりも前から、どういうわけだか存在しているということを使ったものだ。

〔20〕人間が言葉を話しているのではない。言葉が人間によって話しているのだ。

さらに、〔16〕「言葉の力というのは、魔法のようなものだ」も付け加えられるかもしれない。「宇宙」や「神」まで持ち出して、ということも困惑に拍車をかけることとなっているに違いない。

これ以外については、それほど理解が困難なことを言っているとは思われない。〔1〕、〔3〕で指摘される「言葉の不思議」は、一応そう納得できる。〔4〕、〔9〕で説かれる言葉の発生や意味の起源についても、科学や学問をもってしても、いまだ人間は何もわからないでいる。池田の言う通りだ。ここで、池田は、不思議を不思議とすることの必要性を説いている。これも、デカルト以来の哲学の基本的な態度と言ってもよい。

次いで聖書の言葉を引用し、〔13〕がある。〔16〕までは、言葉の創造性、それゆえ「言葉の力というのは、魔法のようなものだ」と自説が展開される。〔17〕、〔21〕は、言語を道具と

する近代的な言語観に対する批判である。人間という主体が、道具としての言語を用いて、意味を伝達するという近代的な用具主義的言語観を執拗に否定している。〔20〕「人間が言葉を話しているのではない。言葉が人間によって話しているのだ」といった近代的主体論への懐疑的態度は、ソシュール以後の言語観ではむしろ常識である。ここに第一の言語論的転回が認められる。モノやコトがあつて言葉があるのではなく、言葉がモノやコトをあらしめるといふ「逆転した視点」を生徒に理解させたいところである。しかし、もちろん、池田は、言語論的転回を啓蒙的に指摘しているのではない。その「逆転した視点」が「人生とは言葉そのものなのだ」という認識の獲得へとつながるよう促していることに注目すべきである。

〔22〕から〔24〕までは、「逆転した視点」から、言語についてというよりむしろ、人生をどう生きるべきかについて述べている。言葉を現実から切り離したり軽視したりする態度を批判し、〔25〕「言葉は、自分そのもの」であり、それゆえ〔26〕「大事にしなければならぬ」と強調する。そして、〔27〕「言葉には万物を創造する力」がある「魔法の杖」である。言葉によって〔26〕「自分の人生を、確実に創っている」と説かれるのである。

現実があつて言葉があるのではない。言葉が現実を在らしめるのだ。とすると、言葉によって世界も自分も創られる、ということになる。目に見えないもの、ないものを在らしめると

いう点で「言葉は魔法の杖」なのである。

このことが中学生にどのような意味を持つのか――。

現実世界を所与のものとして、そのまま受容するのではなく、言葉で考えることによって現実を創って行くことができることを示唆しているのである。たとえ困難に遭ったとしても、言葉によってそれを乗り越えられると言っているのだ。例えば、親に成績のことで叱られた中学生がいるとする。受験を前にして成績が志望校のレベルに届かないことも、私立校へ行くほど経済的な余裕がないことも、いちいち親の言う通りだ。しかし、そこでそれが現実だと見なし、そこで嘆いたり落胆したり自分を責めたりするのはなく、言葉によって受験なり自分の人生なりを考えてみる。自分にとつての受験とは何か。そもそも人生とは何か。言葉を駆使することで受験なり人生なりといった現実を自分の側で再創造していく。あるいは「いじめ」でもよい。「うざい」「死ぬ」といった携帯電話のディスプレイに表象された言葉を実体化して、心的ダメージを受けたり身体を傷つけたりするのではなく、「逆転した視点」から、世界や宇宙をとらえ直すのである。閉塞した目の前の現実だけが現実なのではない。現実とは言葉が創り出すものである。「言葉の不思議」「存在の不思議」に考えを及ぼし、空の高みからもう一度現実や自分を見つめ直す。(・・・ここでの私の例は拙いものだが、池田の「14歳からの哲学」『トランスビュー 二〇〇三年』ではもっと平易に書かれておりわかりやすい。ぜひ一読をお奨めす

る。)

現実を絶対のものとして諦めたりすぐに「キレ」たりするのはなく、言葉によって現実を創造あるいは再構成していく。それは可能な生き方なのだと池田は強調している。

そのようにこの文章を読んだ時、これは、もはや説明文などではなく、生徒を励ましていたのであり、そのような行為遂行型の発話 तरीえているという点で、文学の領域に近づいているとさえ言える。疑いもなく、「だから、がんばってごらんなどい」「あなたも、やればできるわよ」といったメッセージが、行間に漂っている。この文章は、確かにそのようなオーラを発している。渡辺美雄や小山千登世は「言葉の力」の授業について報告しているが(3)、子どもの反応に手応えを覚えるのも、この文章が発する激励というメタメッセージを子どもは素直に感じているからかもしれない。言葉について語りながら、言葉によって生きていくことを推奨し、子どもを深いところで励ましている(4)。それが中学生にとつては最大の教材価値でなくてなんであろう。

この教材が「難解」だとされるのは、不評なのではなくて、むしろ褒め言葉であり、それこそ、池田の意図するところではないだろうか。というのは、池田は「考える」ことを勧めているのであって、そのためには、まずこの文章自体考えるに値するものでなければならぬだろう。しかも、池田の「考える」は自分なりにとか自己流にというのではない、言葉の意味の絶

対性へと向かうものでなければならぬ。むしろ「考える」という行為自体に創造性がある。だから、「考える」はけっして完結するものではない。ないものを在らしめる魔法の言葉は、たんなる道具ではなく自分自身であるから、人生が完結することがないのと同様、「考える」ことにも終わりはない。だから、この教材に何かを教えてもらおうとか簡単に理解しようとする態度自体が誤りなのである。この教材自体を「考え」なければならぬ。いや、考え続けねばならない。ここでは、教える側が教材を理解して、生徒に授業するという一般的な教材観はいったん破棄されなければならぬかもしれない。まず教師が理解できるという前提に立つとしたら「怒り出」したくもなるだろう。このテキストは、うまく生徒に教えるということ自体をそもそも期待していないようだ。生徒とともに考え、話し合う、しかも、絶対性に向かって、である。「言葉の力」は、既成の教育や実践のありようにも再考を促しているとも言よう。

最後に、池田の「言葉の力」を読んでいて、私の頭から離れなかったのは、池田の言いたいことは、文学といわれるテキストを読むことよって遂行される、ということである。ないものを在らしめ現実を再構成する、けっして解答などなくどこまでも考えて行けるという意味において、文学こそ「この畏るべき言葉の魔法」なのではあるまいか。

(1) 須貝千里は「池田氏の『言葉の意味』をめぐる、それは「人間」以前、「地球」以前、「宇宙」以前にあったという提起は、ソシユールの提起によって引き出された「相對主義、アナキー」問題Ⅱ「言語論的転回」を超えていくことに向かつていく」と述べ、「池田氏とともに、「言語論的転回」の再転回という課題に挑んでいくことこそが、国語教育の大転換の核心の課題なのである」と結論づけている。(池田晶子「言葉の力」の位置『日文協 国語教育』No.38 日本文学協会国語教育部会 二〇〇八年五月) また、「言語論的転回の転回」については、丹藤博文「この教室に『言葉』はありますか?」(『日本文学』No.666 日本文学協会 二〇〇八年一月)を参照されたい。

(2) 池田自身、「言葉の絶対性」について、生前次のように発言している。「言葉の不思議、その絶対性に気づかせ、それについて考えさせる以外に、子供に善悪を教えることはできません。」(『言葉の不思議』『中学国語通信 道標』No.6 教育出版 二〇〇三年一〇月 三頁)

(3) 渡辺美雄は「『言葉の力』を読む」『中学国語通信 道標』No.15 教育出版 二〇〇七年一〇月 三頁)において、「今回の学習の何よりの成果は、言葉を自立した存在として対象化して考える生徒が増えたことだ」と述べている。また、小山千登世は「私にはそれ以上に手応えがあつ

た。それは手応えという他ない不確かなものだが、その後の教材の感想と比べてみても、難解なこの文章に彼等が挑み、格闘し、揺さぶられていたという正に手応えなのである。(因みに先日一年間の授業のまとめとして、一番印象に残った教材を聞いたところ、『言葉の力』を挙げている生徒が多数いた)と指摘している。「教室の中の『言葉の力』——国語教室一年の実践——」(1)に同じ。一五頁。

(4) 姥塚文明は「(前略)政治家をはじめとする大人の欺瞞性に満ちた言葉に汚染されつつある少年少女たちに宛てた激励文だ」(『言葉の力』雑感(1)に同じ)と述べている。

(たんどう ひろふみ)